

## 十字街頭の塔

厨川白村の著に二冊の論文集がある。一冊は『象牙の塔を出て』と言い、もう一冊は『十字街頭へ』と言い、彼が純粋な芸術を離れて社会の事に関わろうという態度を示している。わたしはいま彼に倣って、わたしは十字街頭の塔に居ると言おう。

わたしは小さなころから十字街頭の人であった。わたしの故里は華東の西朋坊口で、十字街頭の曲り角には四軒の店があり、一つは麻花の屋台、一つはチビでハゲでヒゲの開いた泰山堂薬店、一つは徳興酒屋、一つは果物屋で、われわれはみなその店の主人を華陀と呼んだ。というのは彼の果物は仙丹のように何とも高かったからである。以後わたしはこの街からあの街へと引越して、街頭の空気を吸い尽し、やらなかった事といえば、ただ相公殿〔若衆宿だが蔭間宿の意あり〕で夜を過すことだけであった。したがってわたしは本物の“街の子”というわけにはいかないが、要するに街とは縁があつて、決して耳袋をつけなければ外出もできないような人物ではない。わたしが余計な事が好きで、紳士の態度に欠けるのは、たいていこのせいで、以前祖父もわたしを罵ってこれは下賤の相だと言った。話はこうだが、わたしは車を引いて水を売る連中の仲間だと自認している。だがあれこれ考えようとする性質で、時には腰掛けを引きよせてしばらく黙想したいと思うのだが、“提灯を見る”人々のように、長らく路傍に突立っているわけにはいかないので、わたしのト居は十字街頭の塔の中ということにならざるを得ない。

塔と言えば、第一に思いつくのは故郷の怪山の上の応天塔である。瑯琊郡の東武山が、ある夕べ飛んで来て、人々がそれを怪しんだので、怪山と言い、後に又飛び去りはしないかと恐れて、天辺に塔を一つ建てたのだそう。主殿の窓から一望すると、東南角の塔の姿が真先に眼にとびこんで来る。中元前後には塔の上に、おばあさんたちの好意で寄進された地獄を照す提灯がいっぱい点灯され、夜にそれを眺めると格別にきれいであった。しかし宣統年間に塔は結局それによって失火し、焼けてただ外側だけを剩すことになり、もうおばあさんが登って提灯を点けることができなくなってしまった。十年前わたしはある友人と塔下に行つてしばらく徘徊したことがあり、一つ磚の片らを拾った。磚の端には凸文で楷書の六字、“護国禪師月江”とあつたが——結局この和尚がどんな人かは調べがつかなかった。

しかしわたしが言う塔は、決してあの“<sup>そとぼ</sup>率堵波”や、あるいは“人の一命を救うは七級の浮図〔仏塔〕を造るに勝る”というような物ではなく、実は展望台・角楼の類、西洋の国では——大衆の歓迎し、習見する音義で訳すと——“<sup>タワー</sup>塔圍”と称するものがすなわちそれであり、異端でなければ、帝国主義の塔である。浮図の中は静坐黙想するのに本々とても向いているのだが、いまではそれに何でもが仏化しつつあり、塔に住むのもとてもハイカラなのだ。だがわたしの黙想は半分が口実で、実は喧噪の中に安全な地を得たいと思うのだ。たとえば前門の宝石店が鉄門を備えているように。廊房頭条のビルには別に厄払いの象徴物があるけれども。わたしは十字街頭で久しく暇潰しをしたが、結局彼らの仲間には入らず、市民の中に割りこむのは、いささか不快であり、またいささか危険でもあつた。（連中にわたしの眼鏡をこわされやしないかと、）だから最もよいのは角楼に坐つて、二斤の黄酒を飲み、大通りを眺めながら声をあげ、心中のうっとう

しさを吐す、不機嫌な時は楼の窓を閉めて、自分の「九成宮」を臨写する。なんと自由で気ままなことであろう。ここまで書いて来てふとヨーロッパ中世の民間伝説<sup>i</sup>を思い出した。木版画にはハットー主教が怨恨の亡霊が化けた鼠の化物から逃げ、荒れはてた島のまるで大きな煙突のような煉瓦造りの塔に身を隠すが、慌てたので神父の冠を被った上半身が露出していて、一大隊の鼠がみんな水を渡ってやって来、何匹かの大鼠はすでに塔の天辺まではい上った、——後でこの主教は結局鼠どもに食われてしまったということだ。ほれ、恐いでしょうが。こう言うと、そうした角楼もあまり当てにならないようだ。だが鼠は入れるが、人は入れないなら、どうせわたしは鼠とは仇敵にはならないから、何の心配もない。わたしはまた前門外の鉄柵の門の安全性を考えたが、わたしの塔でも十分対抗できる。もし雍濤先生の格言亭<sup>ii</sup>のよう建造するなら、むろんもっと堅牢である。

ひとが象牙の塔を離れて十字街頭に行くのに、わたしは十字街頭に塔を建てて住む、うまく立回ったようになってしまうだろうか。わたしはもともと何の芸術家でもなく、象牙や牛角の塔もないから、自然と街頭に立つことになる。しかしまたいささか疲れるし、人混みの押し合いへし合いが恐い、そこで通りに面した塔に住むしかない、これはとても自然な事である。ただいまの中国では、こういう態度は最も上乘でない。大衆が塔を見れば、これは知識階級だ（罪がある）と言うし、紳士商人が塔が路傍に在るのを見れば、こいつは党人だ（取締るべし）と言う。だがこれも何の妨害にもならない、やはり水竹村人〔徐世昌〕の言う“その自然に聴<sup>まか</sup>す”のように、かまわなければよいのだ。どうせこうした閑話はみな当にならないし、長つづきもしない。ほんとうを言うと、この塔と街とは本来決して関係のないものではない、世事を避けて塔に縮こまるのはもともと街頭に対する反動であり、街頭に出て仕事を説く人もやはり彼らの塔を持っている。彼らは自ずと大衆と乖離した理想を持っているからである。要するに街頭の群衆といっしょに揉み合いへし合うつもりだけはあるが、自分の意見に依って一言二言でもものを言おうとしない人こそ、ほんとうに彼の塔を持たないのだ。だからわたしの塔もわたし一人だけのものではない、この名前はわたしがそれに付けてやっただけのことだ。（民国十四年二月）

※初出：1925年2月23日『語絲』第15期

i Bishop Hatto Baring Gould の *Curious Myths in the Middle Ages* に見えるネズミの塔の話



## CURIOUS MYTHS OF THE MIDDLE AGES

BY  
S. BARING-GOULD, M.A.  
LECTURER IN "HISTORICAL LITERATURE," &c.

Second Edition

PHILADELPHIA  
J. B. LIPPINCOTT & CO.  
429 N. SECOND STREET

1886  
[DUBLIN BRANCH]  
15

LONDON  
W. CLAY & CO.  
BUNGAY, SUFFOLK

ii 雍涛先生の格言亭 未詳。